

ジュラーヴリ

ЖУРАВЛЬ



チェルノブリ 32 周年の集い

チェルノブイリとフクシマを結んで
8 年目のフクシマと向き合い、
被害者と共に健康・くらしを守ろう
フクシマを核時代の終わりの始まりに

- * 報告 1 : 8 年目の福島を訪れて (「救援関西」
フクシマ訪問団)
- * 報告 2 : チェルノブイリ支援・交流の経験から
フクシマの健康と医療保障を考える
(「救援関西」事務局)
- * 質疑・討論
- * アピール



大堀相馬焼「走り駒」

<バザー：ベラルーシの民芸品、手作りケーキなど>

日時：4月15日(日) 1時半～4時半

場所：大阪市立生涯学習センター

第1研修室(大阪駅前第2ビル5F)

資料代：700円

多くの方の参加をお待ちしています!!

問合せ：072-253-4644 (いのまた)

0797-74-6091 (たなか)

<cherno - kansai@7titan.ocn.ne.jp>



フクシマ事故から8年目を迎える3月16日から19日まで、「救援関西」のメンバー4人で福島を訪れます。檜葉町の天神岬スポーツ公園で行われる「2018 原発のない福島を！県民大集会」に参加し、また、事故後から今まで、来阪して頂きフクシマの現状を伝え、訴えて下さった懐かしい方々を中心に皆さんとお会いし、交流してきます。原発事故という大きな被害がきっかけで、お会いすることになった福島の友人の皆さんですが、でもこのように巡り合えたこと、互いに「顔の見える関係」をこれからも大切にしながら交流していきたいと思います。また、「福島事故被害者と連帯して被害者の健康と生活の保障を求める政府交渉」の呼びかけ9団体の交流会が、16日にいわき市で開かれますので、「救援関西」も呼びかけ団体の一つとして参加します。4月15日大阪での「チェルノブイリ32周年の集い」では、「福島訪問」報告を行い、関西の皆さんに被災地の様子や人々の近況をお伝えしたいと思います。

福島では、「復興」の掛け声のもとに、「リスク・コミュニケーション推進」「風評被害払拭」が喧伝され、被ばくによる「健康被害」は、「今も、これからも出ない」ものにされつつあります。しかし現実には事故により無用な被ばくをさせられ、健康リスクを負わされたのです。原発を推進してきた国の責任において、全ての被害者に「健康手帳」を交付するなど、生涯にわたる健康管理と医療・生活保障を行うことは当然のことで、最低限の国の責任です。福島県県民健康調査では、事故当時18歳以下だった子どもたちのうち、すでに200名近い「甲状腺がん・疑い」の診断がなされています。「集い」では、ヒロシマ・ナガサキの被爆者の運動にも学び、チェルノブイリ支援・交流の経験も活かし、事故被害者の健康と医療保障を国の責任で行わせるために、事務局報告をふまえて皆さんと一緒に話し合い考えたいと思います。



福島(2012.4)

報告：「救援関西」発足 26 周年の集い

チェルノブイリとフクシマを結んで 子どもたちの健康と命を守ろう フクシマを核時代の終わりの始まりに

昨年 12 月 17 日、チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西は、発足 26 年の集いを持ちました。チェルノブイリ事故から 31 年半、フクシマ事故からは 6 年半が経過しました。伝わってくる政府の福島事故被災地への「対策」は「リスク・コミュニケーションの推進」と「帰還」「復興」、「廃炉のロードマップ」。長期的に必要な、被災地の人々の健康と生活を守る方策と乖離するばかりです。



「集い」では、救援関西事務局による、2017 年の活動報告と共に、チェルノブイリ被災地の高汚染地に住む子ども達の健康フォローを 30 年続けているロシアの小児放射線防護センターの取り組みの紹介と、日本学術会議「放射線防護・リスクマネジメント分科会」報告「子どもの放射線被ばくの影響と今後の課題—現在の科学的知見を福島で生かすために—」の特に「『子ども目線の ALARA』導入への提唱」に対する批判を取り上げました。また関西で保養に取り組む「タコ焼きキャンプ」の小野洋さんに、「保養の今」の報告を御願いしました。そして、ダンスコアポシブルによる創作バレエ「折り鶴」も披露され、平和への思いを共有しました。

《代表挨拶》



長崎被爆者でもある代表・山科和子さんの挨拶で集いは始まりました。「原点は戦争と原爆。戦争をしてはいけない。私は、子ども達が私の様な目に合わないよう世界中に訴えてきました。そしてチェルノブイリ以降は原爆だけでなく、(平和利用は原爆とは違うという人に)いつもチェルノブイリのことを伝え、『必ずヒバクシャがうまれる』と訴えてきました。皆さん、ありがとう。続けてこられたのは皆さんのおかげです」と、95 歳とは思えない元気な声に励まされました。

《事務局報告》

チェルノブイリは事故から 31 年たっても、健康被害の全容解明はまだこれからです。事故後ソ連崩壊も相まって生活物資が不足していた深刻な経済的困難の時期から比べると生活は「豊かに」なったようにも見えますが、貧富の差が拡大し、一般の人々の収入は低く、失業者も減らず、「生活が良くなった」と一概には言えません。被災地の地域経済は 31 年経ってもなかなか「復興」「発展」してはいません。広大な高汚染地があり、放射能汚染と隣り合わせの暮らしはそのままです。

住人の健診・体内放射能測定・食品の放射能測定・子ども達の非汚染地での保養等、被ばく防護対策や健康管理は続けられています。

福島事故でも人々の生活・地域社会全体が大きな打撃をこうむりました。事故は未だ収束せず、5万5千人（福島県 2017.9）もの人々が避難生活を余儀なくされ、大多数の人々は放射能汚染と被ばくを心配しながら汚染地での生活を続けています。被災地の放射線量は全体としては下がってきていますが、子ども達の身近な環境にホットスポットが存在し、特に山や森は除染できないままです。保養は放射能を気にせずに自然と触れ合う普通の生活を取り戻す貴重な機会ですが、日本では国の支援はありません。逆に 20 mSv/年基準で避難指示が解除され被害者への支援の切り捨てが進められています。

私たちはあらためて、「互いに顔の見える関係を大切に」「被害者自身の活動を支援し」「ともに考え協力して取り組む」姿勢を大切にしながら、「ヒロシマ・ナガサキ、チェルノブイリ・フクシマを結んで、支援と交流を広げ、被害者の人権と補償の確立を求めていきましょう」と提案しました。

***今年の活動の報告**

・チェルノブイリ支援交流

4月にベラルーシ・ロシアへ現地訪問。若い世代とともに活動が続けるために意見交換を行ない、放射線教育・甲状腺検診・被ばく防護など、フクシマに活かすための情報も収集。

ノボキャンブ支援

・フクシマ支援交流

10月に浪江町から岡洋子さんを招き、アニメ「無念」の自主上映とお話の集い

「ゴーゴーワクワクキャンブへの協力」等

・救援関西発足 25 年冊子

「チェルノブイリ・ヒバクシャとともに～25 年のあゆみ」を発行。

・政府交渉

「20 ミリシーベルト基準による福島原発事故被害者切り捨て政策の撤回・甲状腺医療費の生涯無料化・原発再稼働中止を求める要望書」に基づく政府交渉に呼びかけ 9 団体の一つとして参加。

・その他、各地でのバザー・脱原発の集会参加等

***来年の取り組み（提案）**

・チェルノブイリ被災地訪問：交流と支援

・福島訪問

・脱原発の集会などに参加 等

《ロシア小児科医（小児放射線防護センター）の取り組み紹介》



チェルノブイリの経験をフクシマに活かす試みとして、高汚染地の子どもたちの長期健康フォローを30年にわたって続けている、ロシアの小児科医、ラーリーサ・バーレバ先生たちの活動の紹介がされました。先生らは事故直後からノボジブコフなどの高汚染地（15 ㏞/km²以上）を含む汚染地で子どもたちの健診に取り組みました。1990年ソ連保健省の決定で「センター」が創設され、1991年

からは特別プログラム「チェルノブイリの子どもたち」が決定されました。医療の技術基盤強化、医療従事者の訓練、フォローアップの設計と導入、通年のリハビリ・子どもの健康増進策の立案と導入が図られ、センターを中心に長期モニタリングの調査集団（リクビダートルの子ども・避難者の子ども・汚染地の子ども9万5千人）が確立されました。

汚染地の医療機関と連携し、検査が必要な子はモスクワのセンターに送り入院検査します。一方、汚染地のみでなく全国各地から毎年の小児疾病の発症状況や人口動態がセンターに送られ25年にわたりデータを収集しているとのことでした。

実際にセンターを設立し被災地と連携して調査を続けてきたのは臨床の小児科医たちです。資金不足や政府のチェルノブイリ被害軽視の圧力に抗して、汚染地の子どもたちを守り、次世代を含めてその健康影響を見守り続けることの重要性を政府や学会に訴え続けています。長期にわたる住民の（特に子どもの）健康調査と健康管理が必要なのは日本も同じですが、福島事故から6年半、未だに子どもたち全員を対象にした全身的な健康診断のシステムはありません（もともとソ連・ロシアと日本とでは、国による健診制度の違いはありますが）。日本とはまた違った困難の中、子どもたちの健康を守るセンターの医師たちの姿勢から学ぶことは多くあります。

《「日本学術会議」（放射線防護・リスクマネジメント分科会）による2017年報告

「子ども目線のALARA」（＝子どもの命と健康を「金勘定」）等への批判》

日本学術会議というと、日本を代表する研究者の学術的団体であり、一応独立して政府に勧告ができるとされていますが、実は会員は内閣府（政府）が任命します。放射線防護・リスクマネジメント分科会は、そのメンバーの顔ぶれからすると、国と電力会社の意向を科学的装いをもって支えるため、2012年に設置されたものといえます。分科会の報告は以下のようなものです。

① 「リスク・コミュニケーション」のさらなる推進

「リスク・コミュニケーション」で説得して、「復興推進」「不安による悪影響を防ぐため」に、「検出限界以下の放射線リスクは容認」することを人々に押し付けようとしています。子どもの被ばくについて、国連科学委員会（UNSCEAR）報告に依拠して、「将来のがん統計において被ばくに起因する有意な変化がみられると予測されない。甲状腺がんについては、最も高い被ばくを受けたと推定される子どもの集団については理論上そのリスクが増加する可能性があるが考慮しなくてよい」という見解を前提としています。

② 「子ども目線の ALARA の原則」の導入を提唱

「ALARA の原則」とは、被ばくはメリットがリスクを上回る場合は、「社会・経済的な要因を考えて、合理的に達成可能な限り(as low as reasonably achievable)被ばく量を減らす」という ICRP（国際放射線防護委員会）の放射線防護の考え方であり、被害者の立場に立って、被ばくを最小にするという考えではありません。つまり費用と便益を天秤にかける考え方（命を金勘定）で、このような考えを、子どもの被ばく防護にも適用することを検討すべきと、これまでより一步踏み込んで被ばくの押し付けを提唱しています。原発事故では、リスクをもたらされるのは一方的に子どもですが、メリットは原子力産業のメリットです。

③ 「小児甲状腺検査の結果は放射能の影響とは考えられない」

福島県県民健康調査検討委員会は、これまでに診断された甲状腺がんについて、被ばく線量がチェルノブイリ事故と比べて総じて小さいことと、がん発見までの期間が短いこと等を理由に、いわゆるスクリーニング効果と考えられるとし、現実のリスクを否定しています。「過剰診断」を防ぎ「知らない権利への配慮」が必要と、検診の継続と充実に否定的です。

④ リスクベネフィットと閾値なしの直線関係（LNT）

「放射線防護について、被ばく線量が、日常生活のほかのリスクに比べて十分少なければ、社会的に容認できる。リスクをゼロにするには労力・経済・心理面などいろいろなコストがかかり・・・」と「報告」では述べられていますが、現実には被害者にとっては決して「小さな、容認できる」リスクではありません。福島事故により放射線管理区域レベルに汚染された地域の住民 400 万人について初めの 1 年間の被ばくだけでも数千人規模でがん死（生涯）が追加されると推定できます。

被ばく線量と健康影響の関係は、閾値なしの直線関係（LNT）が知られていますが、「報告」ではこれを否定的に扱い、モデルとのみとらえています。また、原発事故の被害者は、リスクを強要されベネフィット（便益）は受け取っていません。

福島事故被災地では、国により低線量被ばくによる健康リスクを過小評価・隠蔽しながら、「復興」政策の下に、被ばくの押し付け、支援策打ち切りが進められています。その一方で国と電力会社は全国原発再稼働を進めようとしています。

事故から 7 年目に改めてこのような報告が出されることの意図—福島被害をなかったことにしようとする—を明らかにし、批判の声を上げていきましょう。

《保養の現場より》

3・11 の衝撃の時、多くの人が何かしなければと思い悩みました。その中で、「思う」だけでなく行動に移された方々がいます。関西の地で、まずは子どもたちのためにできることをと、被災地から放射能を避ける目的で、子どもたちの保養をスタートさせたグループがあります。

今回は自らも手探りで保養をはじめつつ、多くのキャンプの「師匠」もされている、明石のタコ焼きキャンプの小野さんに、「保養の今」「被災地の人々の思い」をお話ししていただきました。

*小野さんのお話

・2011年3月、破局を避けるため必死で尽力する原発労働者への心配や近辺の子どもの健康被害の懸念、関西も汚染されるかもしれないという恐怖から心穏やかではおれず、保養キャンプに取り組む決意をした。

・6年半経ち、福島都市部の光景は何もなかったようになり、関西では報道も稀になった。国や県には、問題を小さく見せたいという当初からの思惑がある。現地の実情は、放射能と暮らすことの慣れ、疲れ、諦めもあり、また、除染や時間経過に伴う放射線量の低下や土壌の質が幸いし農作物へのセシウムの移行が少ないということもあり、表向きは落ち着きを取り戻している。

・しかし、事故の収束が見通せないこと、まだ帰れない地域が膨大にあること、放射線量はこれからはあまり下がらないこと、初期被ばくの健康被害の影響はずっと心配など、帰る、帰らないにかかわらず被害者が直面する困難は続いており、原発事故で深刻化した社会問題はさらに深くなっている。

・その中で親の意識も変わり二極化してきている。保養の目的は当初の被ばくに伴う健康不安から今は自然体験の不足を補うことへと変わってきている。しかし、保養不要論の前に保養の存在を知らない、参加の機会がない親子は多い。

・福島の被災当事者と（関西で）脱原発を考えている人たちとの意識の乖離は大きい。福島に住む様々な立場の人々の声を聴くことが大切である。

・事故直後と違い、スタッフ不足と疲弊、資金不足で社会的関心の低下などで、保養を実施する団体は減っている。

・保養の課題は変わっても本質は変わらず新たな必要があり保養を継続したい。保養を通じて「橋渡しの役割」もあるのではないかな。社会的認知を拡げ、公的支援を展望する。



実際に保養に関わり続け、その現場をよく知る小野さんのお話は大変貴重なものでした。

6年経って「復興」が強調され、一見落ち着いてきたようにみえますが、問題は深刻化しています。保養の目的も、当初の被ばくに伴う健康不安から今は自然体験の不足を補うことへと変わってきています。たとえ保養の目的は変わっても、放射能汚染は続いていて、豊かな自然の中でのびのびと遊ぶことはできない子どもたちにとって、保養は大きな意義があります。でも、そもそも保養不要論の前に保養の存在を知らない、参加の機会がない親子は多いとの指摘は考えさせられました。そして被災当事者と（関西に住む）そうでない人との意識の乖離は大きく、だからこそ福島に住む様々な立場の人々の声を聴く必要があり、保養は一つの「橋渡し」の役割もあるのではないかという指摘には頷かされました。現在、行政による公的支援がない状況で保養を担うスタッフ不足と疲弊、資金不足の中で、公的な支援の必要性がますます強まっています。風評被害をあおるという宣伝や「リスク・コミュニケーション」推進に惑わされずに保養の必要性を広く訴え、きちんと公的支援を求めていく必要性を改めて痛感しました。

お話の後、関西で保養を行っているいろいろなグループから取り組みについて報告があり、保養の現状について知る良い機会となりました。さらに質疑応答があり、周りからよく聞かれること、気になっていた課題について少し突っ込んで議論できた集会でした。

《バレエ「折り鶴」 ダンスコアポシブル》

久々にダンス コア ポシブルのバレエを見ることができました。

白い妖精たちは本当の鶴のようにフワリと舞い降りて、ひとりひとりの心を覗くように訴えかけます。

曲は「ヒロシマの少女の折り鶴」。モンゴルの歌手オユンナさんが歌った、きっとどこかで聞いたことのあるなつかしい曲です。この歌の主人公は2歳で広島原爆に遭い、その後白血病と闘いつつ12歳で亡くなった佐々木貞子さんです。きっと思いが叶うと、鶴を折りつづけたという話は世界の人々にも伝わり、遠いモンゴルで心に訴える音になりました。

アメリカの大統領の「先制核攻撃」、「使える核兵器」配備がニュースに出ています。日本は黙っています。このような政策は、被爆者の苦しみを踏みにじるものです。

折り鶴に祈りを込めて。今こそ。

(由美)



クラスノポーリエのベーラさんの お見舞いに行ってきました



2月18～22日、チェルノブイリ被災地クラスノポーリエの小児科医ベーラ・ルソーバさんのお見舞いに、通訳の松川さん（モスクワ在住）と振津の二人で行ってきました。これまでに、皆さんにも何度かご報告していますが、ベーラさんは、3年余前に脳梗塞で倒れ、自宅療養中です。ベーラさんは、チェルノブイリ事故前から、クラスノポーリエの小児科医として地域の子どもたちの健康を見守ってこられた方で「クラスノポーリエの母」と呼ばれて地域の皆さんから慕われています。「救援関西」発足の当初から長年にわたって、私たちのクラスノポーリエへの支援・交流の受入を担当して下さい、日本にも4回来て下さって現地の実状も伝えて下さいました。福島原発事故の翌年には、福島の被災地も訪れ、被ばくから子どもたちを守りたいと悩んでいた福島のお母さんたちとも交流し、自分たちのチェルノブイリ事故後の経験を伝え、励まして下さいました。

<ベーラさん宅を訪れて>

ベーラさんは残念ながら、左半身麻痺のまま、依然として寝たきり状態で、1日に1回くらいご家族の介助で車いすに座るのが精一杯の状態のようです。ベラルーシでは、医療は無料で、医師の往診や訪問看護はあるようですが、在宅リハビリや介護ヘルパーなどのサービスはまだありません。ベーラさんくらいの程度の脳梗塞であれば、早期にリハビリを開始し継続していれば、自力で座ったり、介助や装具補助で少なくとも車いす移動くらいはできるようになったのでは…と思うと、残念でなりません。



ベーラさんのご家族とともに

心配していた褥瘡については、「オーリャ（娘さん）が、クリームを塗ってマッサージしてくれているので、褥瘡はできていない。背部の痛みもない。」と、ベーラさんは言われていました。オーリャさんは、クラスノポーリエの学校の教師をされていますが、休み時間に職場（道路をはさんだ向かい側）から抜け出して、お母さんの介護をこまめにされているようです。職場の仲間も（校長先生も含めて）、事情を知っているので協力してくれているのだそうです。孫のカーチャ（お母さんと同じ学校で昨年から英語の教師をしている）、

クスーシャ（今年、最終学年）も一緒に介護を手伝ってくれているようです。

ベーラさんは、身体は思うように動けませんが、意識も思考もしっかりしておられます。テレビを観て、いろいろと世の中の情報にも関心をよせておられるようです。「北朝鮮の核兵器は日本の皆さんにとって、脅威ではないですか。」「軍事ではなく話し合いで解決すべき。核兵器の被害は二度と繰り返してはいけません。」「原爆被害も原発の被害も、もう繰り返してはいけません。このままでは子どもたちがかわいそう…」と言われていました。また「福島はどうですか。子どもた

ちは病気になっていませんか。甲状腺の病気は出ていませんか。」「福島で会った、お母さん。子どもを守りたいと涙を流していましたね。強いお母さんたちですね。」「日本の原発は止まりましたか。福井はどうですか。」等々…疲れないように気遣いながら、短時間でしたがいろいろとお話しました。脳梗塞で倒れてからもう3年以上、ほとんど寝たきり状態にもかかわらず、会話していると、子どもたちの健康を守り、核被害を繰り返してはならないというベーラさんの意志が変わらないのを感じ、ほんとうに頭が下がります。いつも、子どもたちの健康や将来を案じておられるのをひしひしと感じました。

山科さんの96才の誕生日のお祝いの写真を見せるなどして、日本の私たちの近況もお伝えしました。また、25年前に初めてベーラさんが来日した時には、まだ小学校低学年で、成人してから「救援関西」の訪問団メンバーとしてクラスノポリエへの支援・交流にも行ったT君が、「もうすぐお父さんになる」と伝えたら、ベーラさんも嬉しそうにしていました。色紙（松川さんが訳してくれた）も渡して、皆さんからのメッセージも伝え、預かったお土産もお渡ししました。ベーラさんも、ご家族も、日本の皆さんに、感謝と挨拶をぜひ伝えて下さいと言われていました。

昨年、お会いした時よりも、ベーラさんも、夫のニコライさんも少し明るくなったような気がします。ベーラさんは「孫のカーチャが結婚して、ひ孫の顔を見ないと…」と、言われていました。やはりご家族の助けがあるから、ベーラさんも頑張れるのかなと思いました。息子のジーマさんの家族（ミンスクにいる）のこと、お孫さんが大きくなってもう大学生…と、嬉しそうに話してくれました。息子さんの家族も、よく顔を出してくれるのでしょう。

＜いろんな所も訪ねて＞

クラスノポリエでは、「子どもリハビリセンター」のナジェーダさんのお宅に一泊させて頂きました。夫のバロージャさんは元教師で、今は教育委員会で仕事をしています。いつも私たちの招聘状を準備してくれます。事故後の子どもたちの教育や保養のことなども、いろいろとお聞きしました。「子どもリハビリセンター」に、福島県浪江町の請戸で漁師をしている高野さんが作ってくれた魚の飾り物を届けました。この飾り物は子どもたちの作品と一緒に展示してくれました。

教育委員長のサーシャさんも「表敬訪問」しました。彼は最近、州レベルの委員会のメンバー（クラスノポリエとチェリコフなどのいくつかの地区の代表）にもなったそうで、「この地域をよくするために頑張りたい」と意欲的に言われていました。

学校も訪問し、校長先生にお会いしてきました。昨年、私たちの支援で「ノボ・キャンプ」に参加した子どもたち（7年生が5人）は、「皆、キャンプを気に入って、喜んでいた」とのこと。今回は急な訪問だったので感想文などは準備してもらえませんでした。次回までに感想文や日本で支援してくれた方々への手紙書いてもらうようお願いしてきました。



魚の飾り物は、子どもたちの作品と一緒に展示

クラスノボーリエの博物館にも、アポなしでしたが立ち寄って、「救援関西」の25周年の冊子を寄贈してきました。博物館の展示もかなり変わっていました。チェルノブイリ事故のコーナーは縮小されていましたが、他の展示（郷土の自然・文化・歴史・生活など）はより充実していました。チェルノブイリ事故とその被害については、時々、特別展示などを企画してその時に大きく取り上げるのだそうです。

各所（アポなしで行ったところも）で「今回の訪問の目的は？」と聞かれましたが、「ベーラさんのお見舞いに来た」というと、それだけで誰もが納得してくれました。地域の皆さんが、ベーラさんのことを大切に思い、案じているのを感じました。

報告：振津



山科さん

誕生日おめでとうございます！！

代表の山科和子さんが1月27日、96歳の誕生日を迎えられました。「救援関西」の1月の運営会議の参加していただき、その後、近くのお店で昼食を頂きながらのお祝いでした。山科さんは食事も美味しいと完食。ベーラさんにお渡しする色紙にも達筆でサラサラと書きこかれました。ますますお元気です。人生の先達であり、活動の先輩でもある山科さん、尊敬するばかりです。目指すは100歳。これからもどうぞお元気で！！



「本の紹介」

谷口稜暉(たにぐちすみてる)聞き書き

原爆を背負って を読んで

西日本新聞社 販売額 1500円

「長崎を最後の被爆地とするため、私を最後の被爆者とするため、
核兵器廃絶の声を全世界に」(谷口稜暉)

この本を手にしたのは、昨年12月のチェノブイリ・ヒバクシャ救援関西の集会の折り、Iさんが何冊かもってこられたときの1冊です。

谷口さんの背中に一面やけどを負った写真は、これまでに何度か目にしたことがありましたが、谷口さんのことは余り詳しくは知りませんでした。

1945年8月9日、17才の谷口さんは、郵便配達中、背後から熱戦を浴び、背中一面を焼かれ、3年7か月に及ぶ入院生活を余儀なくされたのです。

原爆によって人生を狂わされた谷口さんの体験を通して、「核兵器がどんなに恐ろしいものか、戦争がいかに愚かなことかを知ってほしい」と、願うものです。

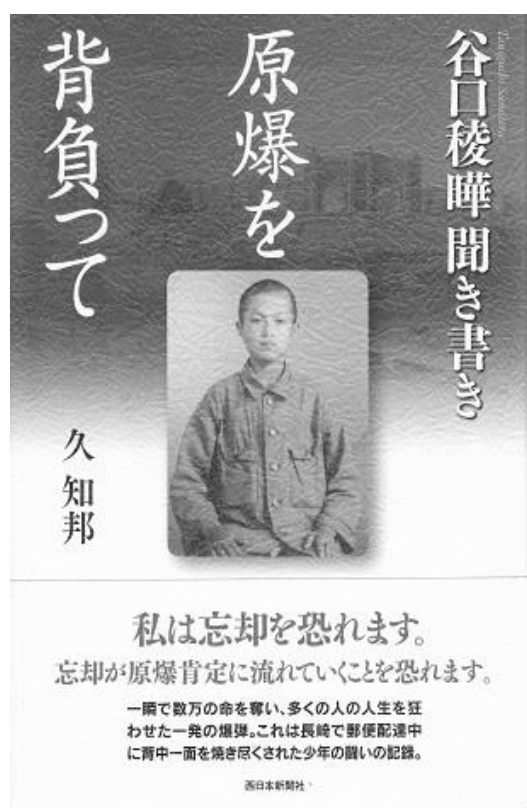
この本を一番に読むべきは、トランプ、キム・ジョンウン、それにアベ、世界の指導者たちではないでしょうか。

トランプは、北朝鮮の核開発に対抗して、小型核爆弾で応戦するとしています。ピンポイント攻撃でも核は核です。被爆は避けられません。こんなことは絶対に許せるものではありません。オリンピック・パラリンピックが終わった後、またしても米・韓合同演習を始めるとか。どうか、対話を重ね、平和的に解決することを切に望みます。

谷口さんは、うったえます。

「私は忘却を怖れます。忘却が原爆肯定に流れていくことを恐れます。」

(Iさんより本の売り上げを、「チェルノブイリ」へカンパとしていただきました。
ありがとうございました。)



久保きよ子

2017 年 会計報告 (2017. 1. 1～12.31)

*チェルノブイリ支援 (「子ども元気」を含む)	収入	カンパ	583,872
	支出	ベラルーシ訪問支援・交流	897,345
	差し引き		-313,473
	繰り越し		856,670
	現在高		543,197
*ベラルーシ保養支援	収入	カンパ	155,400
	支出	ノボ・キャンプ旅費支援	196,200
	差し引き		-40,800
	繰り越し		167,376
	現在高		126,576
*フクシマ支援	収入		112,240
	支出	「ゴーワーク」(保養)支援	104,200
	差し引き		8,040
	繰り越し		242,911
	現在高		250,951
*運営会計	収入	会費・カンパ	285,000
	支出	紙・印刷・郵送代・賛同金等	266,638
	差し引き		18,362
	繰り越し		99,050
	現在高		117,412

皆さまのご支援・ご協力、本当にありがとうございました。
どうぞ今度ともよろしく願いいたします。



♡♣♦♥♣♦♥♣♦♥♣♦♥♣♦♥♣♦♥♣♦♥♣♦お知らせ♦♥♣♦♥♣♦♥♣♦♥♣♦♥♣♦♥♣♦♥♣♦♥♣♦

* さよなら原発関西アクション(チラシ参照)

* チェルノブイリ 32 周年の集い (P. 1 表記参照)

チェルノブイリとフクシマを結んで

8 年目のフクシマと向き合い、被害者と共に健康・暮らしを守ろう

フクシマを核時代の終わりの始まりに



《4.26「チェルノブイリの日」に関電に再稼働反対の申し入れを行いましょう！》

(予定)

32 年前の 4 月 26 日、旧ソ連のチェルノブイリ原発で重大事故が起きました。ベラルーシでは今もその日にちなんでいろんな行事が取り組まれています。私たちもチェルノブイリの日になんで、チェルノブイリ・フクシマを繰り返さないために原発の再稼働反対の声を関西電力に届けましょう。それぞれに申し入れ書を持って一緒に関電に申し入れましょう。

カンパ・会費の納入ありがとうございました！！

(2017.11・21~2018. 3.6)

宇野田陽子 庄田政江 栗田千加子 熊沢滋子 岩佐元春 三田宜充 村田三郎 松本郁夫

木村英子 杉本泉 山崎知行

(順不同・敬称略)

今年度もカンパ・会費の納入をどうぞよろしくお願いいたします。

ニュース発行:チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局

連絡先:〒591-8021 堺市北区新金岡町 1-3-15-102 猪又方

Tel : 072-253-4644

e-mail: cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp

郵便振替:00910-2-32752

口座名:チェルノブイリ・ヒバクシャ救援